次が海門寺公園、海門寺温泉に隣接する海門禅寺。この寺は、別府湾久光島にあったが、先に延命地蔵尊のところで述べた慶長の大地震で陥没し、この地に開創されたという。境内には市指定の天然記念物の立派なクロマツがある。松の脇には、松尾芭蕉の句碑「作り木の　庭をいさめる　志ぐれ可那」が建てられていた。

その外、高浜虚子にゆかりのある秋吉邸や昭和園別荘、かおり荘、財間酒舗、中井質店などの古風な建物があった。この地域内の古くからの温泉である立花温泉、老松温泉、弓松温泉、春日温泉なども見て回った。狭い地域に由緒ある史跡が多く残されていることに驚かされたところである。

杵築・国東紀行

斎藤　哲

平成二十六年十一月十六日午前八時三十分、別府史談会の杵築・国東探訪のバスツアーは、絶好の行楽日和の下、満席の三十数名の参加者を乗せて別府駅前を出発した。

まず、武家屋敷街の雰囲気の中に佇む「きつき城下町資料館」を訪れた。この施設は平成元年に杵築の文化財施設のセンターとして建設され、歴史公園や一松邸も併設されている。そこで、現在行われている杵築城藩主御殿発掘調査の概要説明を受けた。

杵築城は、当初は現在天守閣が再建されている丘陵部に有ったが、慶長から正保にかけて北方平地に移され、十七世紀末までに移転を完了し城山城郭は廃止されていた。元禄七年貝原益軒が「豊後紀行」に記しているように「木付に城なし、町あり」であった。

最近、御殿跡地に建つ杵築中学校の移転に伴い発掘調査を開始した結果、御殿南長屋、御殿西長屋、玄関門、櫻馬場等の御殿中心の杵築城の遺構が明らかになって来ている。

現在の杵築城は、昭和四四年杵築市長の八坂善一郎氏が「杵築城の復元委員会」を作り、募金を開始し、昭和四五年十月に落成したものである。

杵築で昼食をすませ、黒田官兵衛ゆかりの安岐城跡や富来城跡をバスの中から確かめながら、国見の有永邸に到着した。

まず、岐部城跡に登った。国東の豪族岐部氏の砦である。海を渡ってくる敵襲に備えた物見山的なものであったように思えた。麓にペトロ岐部カスイの記念公園が設置されている。岐部水軍の末裔であった彼は、ここからはるか彼方の海の向こうに思いを馳せていたような気がする。長崎・有馬のセミリオで学び、元和元年マカオに渡り、インド経由で日本人初の聖地エルサレムを訪問、元和六年ローマに到着し、司祭に叙階された。同八年帰国の途に就き、マドリード、リスボン、インド、マカオ、シャム、マニラ等を経て、同七年ルバング島を出発して薩摩の坊津に到着した。ペトロ岐部の、現在でも気の遠くなるような凄まじい行程を可能にしたものは何であったのか。彼の信念の強さと行動力には言葉を失う。その後長崎から東北に渡り、仙台で捕縛され、江戸での凄まじい拷問にも棄教せず殉教した。ペトロ岐部は、あの時代に、この辺境の地から出た奇跡の人ともいうべき偉人である。

有永邸は、この地の大庄屋であった。豪華な母屋、離れや蔵、馬屋等に巨石や松などを配した見事な庭を持つ大邸宅である。耕地面積も広くない国東半島にこれだけの屋敷を構えていたとは驚きである。農業だけではなく、漁業、交易などからの財を得ていたのだろうか。これだけの名家も継承する者がなく、町に寄贈されたことは、現在の過疎地の状況の縮図である。同じ国東半島にある私の親族の有長家（母の生家）や平尾家（姉の婚家）も同じような状況であると思った。

今回の史談会の研修旅行も、大分県の知らない歴史等を学べ、心に残るものとなった。次回も楽しみにしながら、有意義なバスツアーを終えたのだった。

市外史跡探訪

石川　学

平成二十六年十一月十六日（日）、別府史談会市外史跡探訪バスツアーに三十四名で参加した。はじめに杵築市に行き、きつき城下町資料館を見学した。資料館は庭園が美しく整備されており、敷石の代わりに瓦が敷き詰められ、歩きやすくなっていた。資料館内は杵築城下の模型や貴重な文化財が収集保管されており大変興味深く見学することができた。研修室では、杵築市教育委員会生涯学習課の吉田和彦さんが、スライドを使って近年注目されている杵築城藩主御殿跡の解説